慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	社会的勢力としての欲望を論ず
Sub Title	
Author	田中, 一貞
Publisher	三田学会
Publication year	1910
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.3, No.5 (1910. 5) ,p.549(45)- 564(60)
JaLC DOI	10.14991/001.19100515-0045
Abstract	
Notes	論説
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19100515-0045

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

ず寧ろ保證準備を縮少せんとするが如き、他國の事例より類推するときは、聊か異樣の感想を生ぜざるに非ずと雖も、是れ英國に於て預金銀行の營業繁盛に赴き、小切手取引の普及するが爲めのみ。敢て他あるに非ざるなり。千八百四十四年の銀行特許條例に就ては、今日に至るまで尙ほ非難の聲を絶たずと雖も、之に依て英國銀行紙幣の兌換を安全にしたるの効果は之を蔽ふ可からず。而して市中銀行は紙幣發行の特典を喪失し、發行權を運用して營業資金を得る能はざるに至るや、預金の吸收に勉めて、預金銀行たるの地歩を鞏固にし、近年諸銀行の合併增資に依り、各銀行が責任を感ずるの念漸く深きを加へ、準備金增加の方針に向はんとするの際之に關する幾多の方案提唱せらるゝに至れり。英國の銀行制度が最も堅實に序を逐うて改良の實を擧げ來るは、是等事實の明に證する所と云ふを得べきなり。

社會的勢力としての慾望を論ず

田中一貞

社會學の範圍に關しては議論區々として一定せずと雖も苟も社會學が一の科學として成立せんとせば兎に角社會の現象を最も能く說明し其間に行はるゝ最も普遍なる理法を探究せざるべからず、スペンサーは社會を機械的に說明して其進化的見地よりして社會的生活を論じたれども彼は只自然界と社會との間の比喩的類似を示したるのみにして、社會的事實を說明するに直に宇宙一般の大法を以てしたるは吾人の首肯し能はざる所なり。ギデングス氏はスペンサー氏の如く進化論的說明を社會に加ふる事を避けて之を同種意識よりし大に主觀的傾向を示したれども、彼は他の一面に於て社會の客觀的說明を許し社會は一面に於て心理的發展なれども他の方面に於ては宇宙勢力の發現なり (Social evolution is but a phase of cosmic evolution Principles of Sociology. p.:363) と說き國家の發達、人口の移動、宗教科學教育の運動等は皆所謂最少抵抗の方向に於するものなりと主張し又宗教

道德哲學科學文學技藝及流行は皆律動の法則に從ふものなりと論じたり。此最少抵抗說及律動論に對て大なる抗議を申込みたるは米國新進の社會學者ロッス氏なり。ロッス氏は社會的現象を以て全然慾望に歸着せしめんとしたる人にして此點に於てはワード氏と全く同說なりと云ふべし。ロッス氏思へらくギデングス氏は一方に於て人間の活動を說明するに主觀的動機を以てしたる後更に之を萬有的勢力論を以てせんとするは其意を得ず、譬へば人口移動の潮流を說明せんとせば人は最も容易に其慾望を滿足せしめ得べき方面に行く者なりと云ふを以て充分なり、然るにギデングス氏は更に人口の移動は最少抵抗の律に從ふものなりと二重の說明を加へんとしたるは何故なりや、吾人の衣服食物より宗敎道德に至るまで凡て人間利害の關係する所には律動的の變化あるは事實なれども是れ只人間の注意力なるものは其對象の變化を要求するものなるが爲なり、何を苦んで之を不平均なる諸勢力の衝突なりとするやと。是ロッス氏が其著、社會學の基礎」に於て論せる所なるが實際ギデングス氏は社會を自然界及精神界の二方面より說明したる人にして其說を略述すれば、社會的簇集は始め食物の供給、氣候、個人又は種族の觸接又は衝突等の自然的外界の事情に依て形成せられ其簇集は重に同種の單位より成立つものにして、此點迄の活動は有形的進動なり、然れども其簇集の內部にて多少類似のある個人間に同類意識を生じ漸々之が傳播して簇集全體に及ぶに至る、又簇集自身も個人の上に勢力を及ぼし個人が簇集其ものが自己の幸福を進むるものなることを覺るに至り故意に其社會的關係を擴張せんとし遂に社會的選擇なるもの甚有力なる現象となる、卽ち社會の各活動の中にて或者は大に人の嗜好に適して歡迎せられて其勢力を增し或者は其不快を招きて嫌忌せられて消滅す、是に於て再自然力は其勢力を逞ふするを見る、卽ち其選擇なるものに極めて適不適及巧拙ありて一種の生存競爭を釀し生存上に不利なる選擇及之より生ずる結果は個人の屈從又は死滅又は其社會全體の滅亡に依りて排除せられ獨り社會の發展に適せるものゝみ生存すべし、故に社會の發展は有形界に始まり有形界に終るものなりと云ふにあり。獨りギデングス氏のみならず社會現象は外的及內的の兩要素の相互的活動より流出するものなりと云ふ一種の二元論を唱ふるもの尠からず、且これ一應道理ある議論にして例へば人口の增殖は一

面は其出生率を支配する所の生殖の衝動、子孫を欲する慾求等の心意的要素に歸すべく、一面は其の死亡率を決定する所の氣候及食物等の自然的要素に歸するとを得べし。更に食物の多少は人力たる耕作にも依るべく更に自然力たる候氣にも依るべく、去れば人事は悉く人力と天命との相合致する所に依りて定まるものと云ふべく、諺にも「人事を盡くして天命を待つ」と云へるは人生結局の眞理を說くものと云ふべし。然れども是は專ら常識的見地より見たる眞理にして更に深く之れを觀ずるに、彼人口の移動、人口の分布、都市の位地、交通の關係等は自然力に依りて左右せらるゝこと事實なりとするも只是間接的の干涉にして直接の原因は卽ち專ら吾人の決意によるものなりと云はざるべからず。此點に關してロッス氏は一個の興味ある例を擧げたり、曰く「急流を渡り對岸の渡頭に直線に到達せんとする船頭ありとせよ、此船頭が急流の力を眼中に置かずして眞直ぐに舟を漕ぎたらんには四分の一哩だけ對岸渡頭より下流に達すべし、此場合に此の如き結果は人間の直線に舟を進行せしめんとする意思と河流の之を流下せんとする力との合成力なりとするとを得べし、然ども若し此船頭にして河流の力を豫め計量

し舟首を適度に上流に向けて漕ぎたらんには必ず其舟をして目的の地點に達せしるむことを得べし、此場合には之を河流と船頭との合成力とも見るを得べしと雖、更に之を主觀的に見れば全く船頭の目的の實現とすることを得べし」と。然り第二の場合の如く其結果は河流併に漕手の兩勢力の豫め知覺計量せられたるものなる事を考ふる時は此船頭の動作は主觀的なる意思の力に依ると看做すも差閊なかるべし。獨り漕舟の場合のみならず人口の移住の場合の如き其目的上の見地より論ずるは最も穩當なるものとして氣候、地味、水、木材等の自然的條件は其目的を定むるに甚有力なる條件なるべしと雖、移住其者の直接原因は移住者の精神にあり。其他凡ての社會的現象は悉く精神的のものにして隨て其直接原因は悉く人間の意識中に求められざるべからず。

此の如く社會的勢力なるものは全く主觀的事實なること疑ふべからずとするも、果してワード氏ロッス氏等の主張する如く慾望は唯一の社會的勢力なるか是亦一の疑問なりと云はざるを得ず。今此疑問に答ふるに先立つて諸社會學者の慾望に關する學說を述ぶべし。

ウイスコンシン大學のスモール教授は慾望を分ちて健康の慾、富の慾、社交の慾、知識の慾、美の慾、正義の慾となせり。此分類は多くの點に於て缺陷あることを免れず、何となれば食慾性慾は確に慾望たるに相違なしと雖もスモール氏の分類に於ては此二慾は除去せられたり、或は此二慾は健康の慾なりと云ふものあるべしと雖もそは不條理なる强辯と云はざるを得ず。又ラッツエンホーフエル氏は勢力、慾望なる文字の代りにインテレストなる文學を使用したり。但し彼の所謂インテレストなる語の意義は甚廣濶なるものにして意識的慾望の外に盲目的衝動反射運動をさへ包含せり。卽ち之を分類すれば左の如し。

(1) 民族的インテレスト——生殖的衝動
(2) 生理的インテレスト——飢渴
(3) 自我的インテレスト——自己に關する凡ての動機
(4) 社會的インテレスト
(5) 超越的インテレスト——宗教及哲學の根源

此内第一の民族的インテレスト及第二の生理的インテレストは最も根本的なるものにして第一のものより第三の自我的インテレストを生じ第二のものより

社會的インテレストが發生し而して劣等のインテレストが滿足せらるゝに隨ひ思考漸く勢力を逞うし遂に無限なる或者に依賴するの情を生じ第五の超越的なる宗教及哲學のインテレストを生ず、之れ生物を刺戟して之を活動せしむる所の勢力に關するラッツエンホーヘル氏の學說なり。

スタッケンベルグ氏は社會的勢力を左の如く分類せり(sociology, vol. I. p. 207.)

(1) 根本的勢力—a 政治的、b 經濟的
(2) 本質的勢力—a 自我的、b 嗜慾的、c 愛情的、d 快樂的
(3) 教化的勢力—a 美的、b 倫理的、c 宗教的、d 知識的

ロッス氏は之を批評してスタッケンベルグ氏の說は大體に於て其當を得たるものなれども第一の根本的勢力なるものは無用の長物なり、政治的及經濟的の勢力なるものは決して根本的のものにあらずして共に更に根本的なる慾望を滿足せしむるが爲に使用せらるゝ機關に過ぎず、卽ち富なるものゝ慾求せらるゝは富が他の慾望を滿足せしむるに有用なるが爲のみ、而して人間には富其者に對する慾望の現存するは事實なれども是は決して根本的のものにあらずして他より變

化し若くは移動し來れるものゝみ。政治上の慾望卽ち政權に對する慾望、自由の慾望等は寧ろ自我的勢力に屬すべきものにあらざるか。ロッス氏はスタッケンベルグ氏の分類に多少の刪除を加へ慾望を分ちて自然的及敎化的の二種とし更に之を左の如く分類せり(Foundation of Sociology. p. 169.)

(1) 自然的慾望—a嗜慾的、b快樂的、c自我的、d愛情的、e娛樂的

(2) 敎化的慾望—a宗敎的倫理的、c美的、d智力的

思ふに慾望なるものは實に社會の活動に非常なる密接の關係あるものにして經濟上の諸現象は云ふに及ばず凡べて歷史上に起る諸種の變遷は其源に泝れば個人又は社會の慾望に歸すべきもの甚多く、隨て吾人にして漫然社會の實際を見んか、一切萬事慾望の發現にあらざるやを疑はざるを得ず。然れども飜て考ふるに社會は先にも論したるが如く其根本は心理的の現象にして、自然界が社會に勘からざる勢力を及ぼすは事實なれども是は悉く吾人の心意を通じて現はるゝものなり。去れば自然力が社會力となるには必ず先づ吾人の精神力に化せざるべからず。然らば精神力中にて如何なるものが社會的勢力となり得るものなりや、

ワード氏ロッス氏等の說くが如く慾望なるものは果して唯一の社會的勢力なりや。將た慾望以外に社會的勢力となり得る精神力なきか。若しありとすれば何づれか其者なりや。是皆吾人の知らんと欲する所なり。而して余は今ワード氏を以て慾望を以て社會的勢力なりとする學者の最大なる代表者となし之を論評して以て此問題に及ばんとす。

ワード氏の說に依れば人間の心意的現象に大體二個の方面あり、一は智力的方面にして一は感情的方面なり、人間の智力なるものは人間が他の下等動物と異なる重なる理由なれども其實は感情のみが人間意識の根本にして、智力の如きは只感情に從屬したる手段に過ぎず、人生の目的は「善」なり、若し生命にして果して吾人の慾望すべきものとすれば生命の保存其者は善なりと云はざるべからず、然れども生命保存は客觀的に見たる生物學的の事實にして更に心理的に之を觀ずれば寧ろ快樂と云へる一種の感情に過ぎず、卽ち前者は自然界の方面より見たるものの後者は意識界の方面より見たるものなり、故に意識的存在としての人生の目的は生命保存より生ずる快感ならざるを得ず、此快感を滿足せしめんとする慾望は人

間活動の動機にして唯一の社會的勢力なり、換言すれば慾望は社會の動力的要素にして智識は此動力を有効になさんが爲に要する指導的要素なり、而して氏は此社會的勢力たる慾望を左の如く分類せり(Dynamic Sociology. vol. I. p. 472.)

(1) 主要なる社會的勢力

a 生命保存の勢力

1, 積極的——快樂を求む

2, 消極的——苦痛を避く

b. 生殖の勢力

1. 直接的——性慾

2. 間接的——血族間の愛情

(2) 主要ならざる社會的勢力

a. 美的勢力

b. 情緒的(道德的)勢力

c. 智力的勢力

以上の分類は單に人間慾望の分類として見る時は大に取るべき所ありと雖是等の諸慾望のみを指して唯一の社會的勢力なりと云ふに至りては余の首肯し能はざる所なり。苟も稱して社會的勢力と云ふ以上は必ず社會に特有のものならざるべからざるは勿論なり、然るにワード氏の所謂主要なる社會的勢力なるものを見るに生命保存の慾望の如き生殖の慾望の如き皆純然たる生物學的の勢力にして之を以て最も重要なる社會的勢力となすは解し難し、去ればにや氏は近年の著述「純正社會學」(Pure Sociology, p. 261.) に於ては(1)主要なる社會的勢力と云へるを有形的勢力と改め(2)主要ならざる社會的勢力と云へるを精神的勢力と改めたり、然れども何れにしても單に人間活動の動機たる慾望のみを列記して社會的勢力是〻盡きなりと云ふは稍常識的の見解にして充分なる科學的研究を經たるものと云ふべからず、何となれば科學的に見たる社會なるものは漠然たる人間の簇集にあらず、社會の社會たる所以は其之を形成する個人と個人との間に何等かの關係卽ち give and take の連鎖の存在するにあり、此關係は社會をして社會たらしむる唯一の事實にして、社會は既に論じたる如く精神的事實なるを以て此 give and take

は又精神的のものならざるを得ず。故に苟も社會的勢力を論ぜんとするものは必ず先づ此個人間の關係を起點として考察する所なかるべからず。此精神上の give and take を豫想せざる精神の活動は全然個人的のものにして「社會的」なる形容詞を冠すべきものにあらず。隨て縱しや慾望は實際社會的勢力なりとするも單に苦を避け樂を取り自己性慾の滿足を求め身の安穩を希ひ美を慕ひ醜を厭ひ若くは眞理を尋ねて自ら理性を滿足せしめんとするが如く個人間の精神的關係を外にして考へられたる慾望は徹頭徹尾個人的のものにして、之を政治に譬ふれば一國の內政とも云ふべきものなり、內政と云へども間接には外國に影響あるものに相違なしと雖も、內政は其文字の示すが如く全然內國を目的とするものにして外國との關係と直接の連絡なきものなれば、內政は何處までも內政なり、間接に外交に關係ありとて內政を以て外交なりとするの不條理なるは三尺の童子と雖も知る所なり。全然個人的なる勢力を以て間接に社會に關係ありとて直に之を呼んで社會的勢力とするは內政と外交とを混同するの類なりと云ふべし。

然らば如何なる精神力は社會的なる形容詞を冠すべきものなりやと云ふに、余の考ふる所にては此勢力は必ず左の四個の中何づれかに屬せざるべからず。

(1) 一の個人心意より他の個人心意に對して運動を與ふるもの
(2) 一の社會心意より他の社會心意に對して運動を與ふるもの
(3) 一の個人心意より社會心意に對して運動を與ふるもの
(4) の社會心意より個人心意に對して運動を與ふるもの

社會的勢力は必ず此四個の勢力の何づれかに屬せざるを得ずと雖も、元來社會心意なるものは個人心意の交渉の結果にして且つ個人心意の中に分布せらるゝものなるが故に個人と社會又た社會と社會との間に勢力の傳播するには、必ず個人の頭腦を通過せざるを得ざるを以て結局個人の心意より他の個人の心意に運動を傳へ得るものは最も根本的なる意義に於ける社會的勢力なりと云はざるを得ず。デユルケーム氏は此種の give and take を名づくるに Impression なる文字を以てし之を三種に區別したり、(一)は人間の思考し活動する所の形式にして、人は多くの人が然かくなすが故に自己も然かくなさゞるべからざるが如き、一個の壓力を感ず道德上法律上の制裁の如き是なり。(二)は此の如く確定せざるも能く個人

を拘束し得るもの卽ち宗教熱の如き是なり。(三)は宗教熱の如く激烈ならざるも社會一般の意見となれるもの是れなり。デユルケーム氏は此の如く社會の心意の壓力に重きを置きたれども其實際を觀察すれば此社會心意の壓力なるものも結局余の既に論じたるが如く個人心意の交渉に過ぎず、タールド氏は此個人間の give and take を模倣の關係に於て發見したり。氏の模倣なるものは極めて廣濶なる意義を有するものにして一の腦髓が他の腦髓に其觀念意志及感情を反射せしむる凡ての心的印象(L'impression mental à distance par laquelle un cerveau reflète en un autre cervcau ses idées,ses volontés, même ses manière de sentir. Etudes de Psychologie Sociale. P.45.)を指すものなれば大體に於て此兩氏の說は一致するものなり。而してデユルケーム氏の所謂 impression と云ひタールド氏の所謂模倣と云ふは結局一の精神より他の精神に與へらるゝ所の暗示に外ならざるを以て余は社會的勢力なるものは窮極する所、暗示を與ふべき凡ての精神力に外ならずと云はんとす。尤も余の所謂暗示なる語は極めて廣濶なる意義にして無意識に與へらるゝ感化の如きものをも、意識的に法律命令教育宗教等に依りて與へらるゝものをも悉く包含する所

のものなるを記憶せざるべからず。而して人は元來極めて暗示され易きものにして平常催眠術に罹れるものゝ如く、觀念をも意志をも感情をも悉く暗示せらるゝ傾向を有するものなり。故に慾望の如きも勿論暗示し又は暗示され得べしと雖も彼ワード氏等が慾望を以て社會的勢力となすは決して此見地よりするものにあらず、若し此種の見地より論せば性慾食慾等の自然的慾望は最も社會的勢力に遠きものと云はざるを得ず。

然らば暗示によりて傳へらるゝ社會的勢力は如何なる規則に依りて活動するやと云ふに大體に於て物質界の運動の法則に從ふものにして、一個人より他の一個人に a なる暗示を與ふる時は同じく a なる運動を起すは自然なり、然るに若し同一人に $+a$ と $-a$ の二力が同時に働きかくる時は此兩力は中和せられ何等の運動を生せざるべし。更に $+a$ と $+a$ が同一人の上に同時に働く時は其暗示力は二倍となりて $+2a$ となるべく、更に a b の二力が分量を異にし方向を異にして一個人に働く時は此兩力の合成力は結局の暗示を決定すべし。然れども此の如きは最も單純なる勢力傳播の形式を示したるものにて實際に當りては他の自然力、個人の

利害、其人の素質、過去の經驗、從來の信仰等の種々雜多の非社會的勢力の干渉ありて決して數學的に規則正しく進行するものにあらず。故に以上は社會的勢力のみ單純に且完全に行はるゝ時の有樣を想像したるものにして、只大體のプロバビリテーを示したるものに過ぎず。然れども此勢力傳播の見地よりして一國文明の歷史を考へ若くは異なる宗教、學說、風俗等の相衝突し或は調和する其活動を見、若くは群集の精神が些細の刺戟よりして俄に驚天動地の大悲劇を演じ、若くは英雄豪傑が五尺の小身を捧げて忽ち天下を威壓し、或は聖人が大慈大悲の敎を垂れて精神的に衆生を濟度する其勢力を觀ずる時は暗示の力の如何に偉大にして其結果の如何に廣大無邊なるかを知るべし。

此の如く論じ來れは此種の勢力の授受の理法に關する研究は殆んど社會心理の全體を覆ふものなるを見るべく、隨て之を詳論するは此種の一小論文の能くする所にあるず、故に余は單に諸學者の慾望に關する分類を列記し、且慾望のみが社會的勢力にあらずして暗示を豫想したる精神力は其智情意の何れに係らず皆社會的の勢力なることを略論したるのみ。

講演

陪審制度論

大場茂馬

私の題は陪審制度論と云ふのでございます。此陪審制度を我邦に布くべきや否やと云ふことは、昨年の夏以來我邦の問題となつて居つて現に帝國議會にも建議案として提出されて居るやうであります。それで此陪審制度を我邦に採用すべきや否やと云ふ問題は、餘程よく研究しなければならぬ問題と考へます。我邦も既に大國の列に入つたことでございまして、且此陪審制度と云ふものは、外國に於て既に布かれて、長い間の經驗もありまするからして、大國の面目として彼れに於ける成績如何、又長く布かれて居るので、いろ〳〵學者の攻究論難の結果はどうであるかと云ふやうなことを考へて、さうして後に採否を決せねばならぬ事柄と思ひます。それで私が此陪審制度論と云ふことを揭げて諸君に御話致すとするならば、少くとも陪審制度採否に關する根本の問題は何處に在るか、又次に陪審制度の淵源はどうであるか、又陪審制度が近世に於て諸國に行はれたのは、どう云ふ譯であるか、又陪審裁判所に於ける審査員と云ふものゝ任務は如何なるものであるか、又陪審裁判所は各國に行はれたとすると、それ〴〵長所がなければならぬ、長所は何れに在るか、又陪審裁判所に就ても隨分非難の聲も多い、さうすると其短所は何れに在るか、又陪審裁判所に關する多數の學者の意見は何れに在るか、國民の意嚮はどうなつて居るか、又陪審裁判所は將來とも尙存續して行く運命を有つて居るかどうであるかと云ふやうな問題に付て、攻究をせねばならぬ事と考へます。併し只今からさう云ふ問題を悉く御話し申す時間はありませぬ、そこで私が豫て陪審制度論と云ふものを、自らが草稿として持つて居る、今日は其中の一章陪審裁判所の短所と云ふだけの事を御話